

論文の要旨

本論文は曲亭馬琴の『新編水滸画伝』初編・『南総里見八犬伝』と『水滸伝』を主たる研究対象として、日本近世文学と中国白話小説の関わりを検討するものである。

江戸初期に日本に流入し始めた中国白話小説は、享保（1716～1735）以降唐話学習の流行とともに教科書として一般の知識人にも読まれるようになり、その後急速に広まって、新しい文学ジャンル・読本の生成と発展にも影響を及ぼすに至る。特に注目すべきことは、四大奇書の筆頭に数えられる『水滸伝』が前・後期読本に与えた衝撃である。その中でも特に重要な役割を果たしたのが曲亭馬琴であった。

第一部では、『水滸伝』諸版本の現存状況と継承を論じた上で、馬琴が『新編水滸画伝』執筆時に閲覧した『水滸伝』の版本について考察する。まず文繁本『水滸伝』諸版本の継承関係を整理し、これまで混乱した状況にあった現存諸版本（文簡本も含む）の呼称の統一を図った上で、馬琴が『画伝』冒頭の「校定原本」に底本もしくは参考テキストとして列挙した『水滸伝』関連書目について論じ、馬琴が『画伝』の序文の中で底本に使用したと宣言している「李卓吾評閲一百回」（以下「評閲百回」）について論じる。『画伝』第五回から第十回の巻頭に載せられている詩詞（「開詞」）と、馬琴自筆資料の内容について『水滸伝』諸版本の本文と詳しく比較することにより、「評閲百回」が百巻百回系石渠閣補刻本であることを解明した上で、2017年に日本で新たに発見された石渠閣補刻本『忠義水滸伝』の本文と書き入れを精査し、馬琴が北静廬から借りた「評閲百回」の特徴がこの本と完全に一致することから、両者が同一のものである可能性は極めて高いとする。

第二部では、『画伝』本文における『水滸伝』諸本の利用状況と、現存する馬琴旧蔵和刻本『忠義水滸伝』（以下「手沢本」）の語釈書入の特性を分析する。馬琴自身は、『画伝』の底本としては「評閲百回」を用いると述べているが、『画伝』と『水滸伝』諸本を綿密に比較すると、該本が利用されたのは第五回から第十回の「開詞」のみで、それ以外の本文は全て和刻本をもとに、一部文繁七十回本と通俗本を用いて作り上げたものであることが明らかになる。更に、内容の増補、原文の省略・再編、誤訳の継承などについて考察を加え、最初の『水滸伝』日本語訳である『通俗忠義水滸伝』の影響が、語義の説明、原文に対する解釈、更には内容の省略・再構成にまで及んでいることを証明し、当時の馬琴はまだ自力で『水滸伝』を翻訳することができず、『通俗忠義水滸伝』に頼っていたと論じる。続いて馬琴手沢本の書入の内容・出典および馬琴に先立つ所蔵者の実態について検討し、初集（第一回から第十回）の馬琴に先立つ所蔵者は、『忠義水滸伝解』・『俗語解』・『小説精言』・『名物六帖』などの唐話辞書、『雲林別墅絵像妥註第六才子書』・『言鯖』などの中国書籍から関連する語釈・出典を探し出し、三度にわたって手沢本に加筆している点から考えて、白話知識に強い関心を持つ人物で、おそらく岡白駒・澤田一斎・五井蘭洲に関連する者と思われること、第二集（第十一回から第二十回）については、語釈書入の数は少ないが、その筆跡および「養菴」と読める蔵書印から、もとの所蔵者は萩の藩医栗山孝庵である可能性があることを示す。以上の考証を踏まえた上で、手沢本書入が馬琴に与えた影響について考察し、書入の誤りと『画伝』本文の誤訳部分が完全に一致する箇所

が複数確認されることから、馬琴が手沢本の書入を無批判に利用したことを明らかにする。

以上の成果を踏まえて、第三部では、馬琴の『水滸伝』様式の完成体と呼ばれる『南総里見八犬伝』がどのように『水滸伝』の趣向を摂取しているかについて検討する。

まず犬田小文吾物語に関して、馬琴は『水滸伝』の類似する場面（武松の虎殺しと李逵の虎殺し、宋江の閻婆惜殺しと潘金蓮の武大殺しなど）を統合した上で、自作の趣旨に合わせて選択して利用していること、小文吾が対応している人物である武松の活躍が幕切れになると、その対応役は直ちに武松から武松物語の直後に登場する宋江へと移行することを示す。続いて、犬坂毛野物語において馬琴は、『水滸伝』の敵役を『八犬伝』の助け役に、『水滸伝』の破壊を『八犬伝』の救助に、『水滸伝』の弱者を『八犬伝』の強者に変えるという形で『水滸伝』の内容を逆転させ、犬士一人に二役を演じさせるという更に手の込んだ仕掛けを施していることを明らかにする。以上の分析を踏まえて、物語の途中で犬士が対応する水滸豪傑が変わっても、馬琴は必ず結末においてそれを元の対応役に戻していることや、分散する水滸豪傑の活躍を繋げて利用していることなどから、馬琴は『水滸伝』のストーリーを順になぞったのではなく、『水滸伝』を登場人物単位で分解して犬士列伝を再構成しているとし、趣向摂取に関して、馬琴はただ『水滸伝』を模倣するだけでなく、『水滸伝』の内容を消化した上で、自身の創作意図や作品の前後の照応関係に応じて、ストーリーを分解し、捻り、或いは二重三重に交叉させており、『八犬伝』は漫然と『水滸伝』の山場や名場面を取り入れたのではなく、綿密な結構のもとに利用していると結論づける。